被災地ローカル各紙統合スクラップ帳の意義と課題

――復興ロジックの探索・再構築に向けて――

大矢根　淳

はじめに
1．雲仙・普賢岳噴火災害――社会学的調査と現地資料
2．ローカル紙スクラップの需要と展開
3．『島原図書館新聞スクラップ帳』デジタル化の意義と手順
4．『島原図書館新聞スクラップ帳』のデジタル化、一般公開の留意点
むすびにかえて

はじめに

本稿では、被災各地の公立図書館で、被災を契機に取り組みが始まる災害関係新聞スクラップ帳づくりについて、その作業の意義、展開可能性について検討する。筆者は四半世紀前、雲仙・普賢岳噴火災害（一九九〇年～）

の現地調査に赴き、地元・島原図書館で、『島原半島関係新聞記事（島原・南高）（朝・毎・読・西・長）』（以下、『島原図書館新聞スクラップ帳』）を手にし、その頃から、そしてその後、現在に至るまで、被災地復興に関わる自身の現地調査において、これを継続的に利用させてもらっている。その間、全国各地の様々な被災地復興現場に赴いては（写真1）、島原のこのような資料の有用性をたびたび、痛感することとなった。(1) このたび、噴火二五年を機に、『島原図書館新聞スクラップ帳』をデジタル化して世に開く可能性について、同図書館と協議・作業を始めたところである。本稿ではその経緯を振り返りつつ、意義、課題について整理しておくこととする。

写真1　岩手・宮城内陸地震スクラップ帳
出所：筆者撮影（2016.6.16）

1. 雲仙・普賢岳噴火災害――社会学的調査と現地資料

一九九〇年晩秋一一月、長崎県・島原半島の雲仙・普賢岳が約二〇〇年ぶりに噴煙を上げ始め、翌一九九一年五～六月にかけて噴火活動が活発化した。火山噴出物が火砕流となって山腹を駆け下り、山腹に堆積したそれらが降雨のたびに土石流の濁流となって川を下った。特に一九九一年六月三日の大火砕流では、警戒中の消防団員と警察官、報道関係者とこれにチャーターされた地元タクシーの運転手、そして世界的に有名な火山学者を含む四三人が巻き込まれて死亡するという大惨事となった。雲仙・普賢岳噴火災害の幕開けである。その後、噴火活動は五年にわたり継続し、その間、火砕流・土石流が度重なり発生したことで、周辺住民の生命・財産を守るために警戒区域が設定（災害対策基本法、第六三条に基づき）されて、自宅に戻れない多くの世帯が発生することと

なった。その中には火砕流・土石流が自宅の上に五〇m以上も堆積してしまって、その後、その地区に復興公共土木事業として大型砂防ダムが建設されることとなったことで、永遠に故郷を喪失（地名の消失）することになる層が出てくることともなった。

当時、災害社会学を専らとする研究者が調査グループを形成し、東京からも筆者の参加するグループが島原に通って、この長期噴火災害を調査した。調査経緯や知見は別稿（伊藤他、一九九四、大矢根、一九九六、横田、一九九五）に譲る。それまでの他の被災事象と異なり、被災した世帯・集落の応急対応から復旧、生活再建を調査していると、そのすぐ脇で、次なる噴火事象によって新たな被災地・被災状況が発生して、あちこちで噴火事象対応がモザイク・パッチワーク状に繰り広げられていて、すなわち被災対応のタイムライン（災害対応行動計画）が複数同時に走る、目まぐるしい長期的複合災害の様相を呈していた。

写真２　『島原図書館新聞スクラップ帳』の所蔵状況
出所：筆者撮影（2015.12.27）

現地調査から帰京してノート・資料を整理しつつ次の調査計画を練っている最中は、現在のようにインターネットがまだ普及していない時代であったから、現地の様相がなかなか把握しきれず歯がゆい思いをした。少し目を離しているうちに、新たに次々に、噴火による諸事象・影響範囲が飛び石状に拡大していった。それに対して市役所・町役場単位では果敢にも、県や国の法制度上の枠組み・規定を弾力的に解釈しつつ運用して、ローカル対応を必死で重ねていたが、皮肉なことにそれら対応の粗密やタイムラグが期せずして発生することとなって、それが不公平・不適合として糾弾されて、現場では「法災」「官災」[2]と呼ばれることにもつながっていった（江川、一九九四）。

筆者らは噴火災害の現状をリアルタイムに把握する必要から、地元ロー

安中地区を中心に

上木場の住宅確保対策　島原市と県が回答

【島原】雲仙・普賢岳噴火災害に伴い、被災地住民らでつくる上木場復興委員会の代表が、市と県に対し、「島原図書館」に対し、島原市と県は三月一日、説明会を開いて回答した。

県は、防災集団移転や農地の復旧など生活再建に関する要望に対して、農地は「住民の要望を踏まえ、九月末までに対応策を作っている」と、「上木場復興の復興・再建」として、「新集落の建設地として、「新集落の建設地を中心に検討している」と、「回答は県案の新集落確保、住宅確保について「要望に沿う適期を選んで」、「上木場地区の再生については「砂防対策や農地の復旧など生活再建に関する要望に対して、農地は「住民の要望を踏まえ、九月末までに対応策を作っている」と、「上木場復興の復興・再建」として、「新集落の建設地として、「新集落の建設地を中心に検討している」と、「回答は県案の新集落確保、住宅確保について「要望に沿う適期を選んで」、「上木場地区の再生については「砂防対策や農地の復旧など生活再建に関する要望に対して、農地は「住民の要望を踏まえ、九月末までに対応策を作っている」と、「上木場復興の復興・再建」として、「新集落の建設地として、「新集落の建設地を中心に検討している」と、「回答は県案の新集落確保、住宅確保について「要望に沿う適期を選んで」、「上木場地区の再生については「砂防対策や農地の復旧など生活再建に関する要望に対して、農地は「住民の要望を踏まえ、九月末までに対応策を作っている」と、「上木場復興の復興・再建」として、「新集落の建設地として、「新集落の建設地を中心に検討している」と、「回答は県案の新集落確保、住宅確保について「要望に沿う適期を選んで」、「上木場地区の再生については「砂防対策や農地の復旧など生活再建に関する要望に対して、農地は「住民の要望を踏まえ、九月末までに対応策を作っている」と、「上木場復興の復興・再建」として、「新集落の建設地として、「新集落の建設地を中心に検討している」と、「回答は県案の新集落確保、住宅確保について「要望に沿う適期を選んで」、「上木場地区の再生については「砂防対策や農地の復旧など生活再建に関する要望に対して、農地は「住民の要望を踏まえ、九月末までに対応策を作っている」と、「上木場復興の復興・再建」として、「新集落の建設地として、「新集落の建設地を中心に検討している」と、「回答は県案の新集落確保、住宅確保について「要望に沿う適期を選んで」、「上木場地区の再生については「砂

上木場地区の復興・再建に関する要望書について回答する鎌ケ江市長＝島原市城内一丁目、森岳公民館＝

資料１　九州ローカル紙の紙面（例）
出所：『島原図書館新聞スクラップ帳』より

カル紙『島原新聞』を定期購読契約することとした。一週間ごと、調査グループの集う研究室宛に郵送してもらって、それを貪るように読んで現地状況の把握に努め、次の調査出張の企画を練った。一～二か月ごとに現場を訪ねては、地元若手駐在記者[3]をつかまえて最近の状況を把握しようと試みた。

被災地調査に赴くとその当時はまず、行政当局各所で関連資料を収集するのが慣例[4]で、これとともに地元図書館等でデフォルトとしての被災前地域状況の把握にかかった。地域特性・デモグラフィック要因（各種統計データの収集）、歴史・文化、ローカルの政治史・社会史、これらは復興・生活再建に際しての原資に該当する事象、データとなるが、それらの把握を地元図書館や民俗・歴史資料館等で行う。そうしたなか、市立島原図書館で、本稿で検討する『島原図書館新聞スクラップ帳』に出会った。図書館カウンター左横の閲覧者用ロッカーの脇に、青いＡ３判スクラップ帳が数冊収められていた（写真２）。手に取ってみると、最初の数冊は島原市の歴史や文化、祭・催事などに関する地元ローカル紙の記事がスクラップされていて、また別の冊子には地元高校サッカーの有名校・国見イレブンの活躍が数一〇ページにわたって（特に、毎年お正月の全国高校サッカー選手権大会の頃は）取り上げられたりする。

そして六・三大火砕流とそれ以前からの土石流の発生状況が、前年の約二〇〇年ぶりの噴火の件とともに、ス

クラップ帳として蓄積され始めていた。私たち調査団は毎回、島原に着くとすぐにこのスクラップ帳を手に取って、帰京期間のブランクを補った。東京サイドでは『島原新聞』一紙を定期購読することとした。これは、島原図書館のこのスクラップ帳で、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』の全国紙[5]西日本版（各紙では九州版、長崎版などと呼称）のほか、『西日本新聞』、『長崎新聞』などの九州ローカル紙の記事がすでに適切にスクラップされていたからである。

図書館のスクラップ帳には、全国紙・東京版には決して載ることのない、したがってその縮刷版にはもちろん掲載されていないローカル短信の数々が漏れなく収録されている。支局の記者は日々、所々に取材に赴いて、馴染みの方々の姿を的確に取材して、例えば被災者集会の模様もつぶさに執拗に伝えている。誰がどのような席順で出席していたか、何が議論されたのか、会場の雰囲気はどうだったのか……、小さな記事の一つ一つにこれら貴重な情報が適切にトリミングされた写真とともに掲載されている（資料1）。

本稿ではこのようなローカル紙スクラップ帳の、被災地復興研究にとっての意義と課題を確認しつつ、この度、筆者が取り組んでいる「『島原図書館新聞スクラップ帳』デジタル化作業（仮称）」の経緯と意義を概説することとする。

2．ローカル紙スクラップの需要と展開

新聞記事を切り抜いてスクラップ帳を作った記憶を有する人も多いことだろう。現在では小中学校でもＮＩＥ（Newspaper in Education）として盛んに行われている。そしてネット環境が普及してデジタル化が進んだところで、スクラップ帳の姿・作業も様変わりしてきた感がある。しかしながら、従前のアナログチックなスクラップ

帳こそが、ことのほか研究に役立つものであることを、この四半世紀、『島原図書館新聞スクラップ帳』を利用させていただいて改めて認識・痛感しているところである。

2－1．新聞デジタル版

全国紙の東京版は縮刷版として一か月ごとに図書として刊行されていて大学図書館などに所蔵されているので、誰でも自由に閲覧できる。しかしながら全国紙といえども地方版は、特に大きな出来事がない限り縮刷版としてまとめられることはない。[6] ところで最近では、各紙、デジタル化が一気に進められていて、特別に有料契約すれば[7]全国紙各地方版もバックナンバー、蓄積記事を読むことができるようになった。例えば、本稿を執筆する今、ここ東京で、雲仙・普賢岳噴火災害（一九九一～）から二五年を経て先日、大規模火砕流の直接被災地・上木場集落で行われた追悼行事についての記事（『朝日』の西部版）が、新聞デジタル版のサイトからキーワード検索（以下の事例は、『朝日新聞』DIJITAL「新聞記事検索」、2016.6.10 閲覧）によって、以下のように容易に閲覧できる。

大火砕流25年　雲仙・普賢岳　山に届け鎮魂の調べ／長崎県

自然の脅威を思い知らされたあの日から25年。島原市内は3日、災害の教訓を再確認する「いのりの日」となった。43人の死者・行方不明者を出した大火砕流。慰霊碑では……（以下略：筆者）

『朝日新聞』二〇一六年六月四日（西部版・朝刊）

各大学図書館では学内ＬＡＮ限定として各新聞社と契約してデジタル版の閲覧を可能にしているところも多い。例えば筆者の所属する大学の図書館では、『朝日新聞』の「聞蔵Ⅱシリーズ」、『毎日新聞』の「毎索」、『読売新

聞』の「ヨミダス歴史館」などが導入されていて、これらの閲覧システムを利用すれば、研究室や学内ＰＣ端末室に居ながらにして、過去の現地版記事を閲覧できる。しかしながらこれはあくまで、キーワード検索してヒットした記事を一つずつ閲覧するためのシステムであって、当時のローカル紙面を一ページずつ手繰って読み進めるためのものではない。その点、例えば『毎日』の「毎索」は、年月日を指定すれば、当該日の紙面を一面ずつそのままの形でめくっていけるようなサイト・デザインになっている。しかしながら、それも「本社」としての「東京」「大阪」の版に限られていて、その他「地方版」の閲覧はかなわない。『毎日』には、地方版のうち「九州」には「福岡」「佐賀」「長崎」「熊本」「大分」「宮崎」「鹿児島」の各版があって、筆者は「長崎」版を閲覧したいと目論んでいたところであるから、試しに大火砕流被害を報じる記事を検索してみた。例えば『毎日』・「毎索」で「一九九一年六月四日」（大火砕流発生翌日の日付）とその周辺の数日をキーワードとして入力してみると、次の画面で「面種」を選択するようになっていて、そこには「本社」「別刷」「号外」とあって、「本社」を選ぶとその下位で「東京朝刊」「東京夕刊」「大阪朝刊」「大阪夕刊」から一つ選択するようデザインされている。残念ながら地元・島原市（長崎県＝西日本）で販売されていたローカル版に達することはできない。

そこで、新聞記事データベースの在り処を様々に検索・手繰って、当該のローカル版にたどりつけるところはないか探した。国立国会図書館のＨＰに、「リサーチ・ナビ」というサイトがあり、そこに「無料記事検索サービス」がある。以下のようなトップページの構成となっている（資料２）。

長崎版を収めていそうなところを探して、「～全国紙の記事検索～」の下にスクロールしていくと、「～地方紙（県）の記事検索」の項があって、そこに、

●新聞記事（郷土関係）見出し検索／長崎県立長崎図書館［last access:2015.7.24］

資料２　国立国会図書館 HP「リサーチ・ナビ」の「無料記事検索サービス」画面

出所：https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-700003.php（2016.6.10 閲覧）

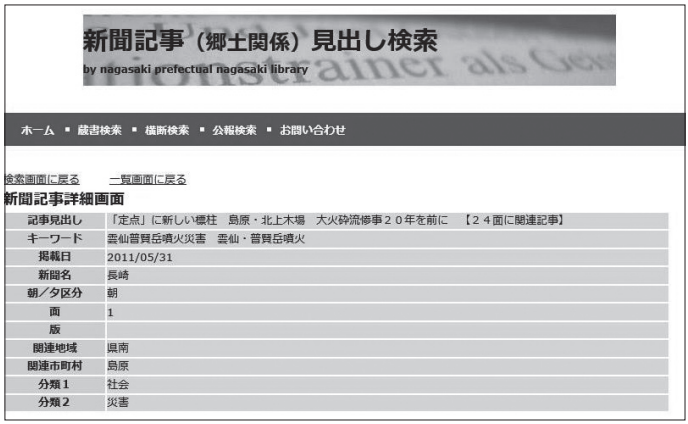
http://www.lib.pref.nagasaki.jp/newspaper/index.php 外部サイトへのリンク

長崎市内で発行された長崎、西日本、朝日、読売、毎日の各紙に掲載された長崎県関係の記事見出しを検索することができます。

とあった。このＵＲＬを開くと「新聞記事（郷土関係）見出し検索」となり、ここにキーワードや掲載日を入力すると、さらに「関連地区（複数選択可）」として「県南」から「島原」「雲仙」「南島原」地区まで選択できるようになっている。これで何とか当該のローカル版にたどり着けそうだ。筆者のフィールドとしている島原市上木場に関する記事を検索するために「キーワード」に「上木場」を入力して「検索」したところ、一〇件の記事がヒットした。そのうちの一件をクリックすると、以下のような検索結果＝「新聞記事詳細画面」があらわれる（資料３）。

この検索結果には、以下の注意書きが添えられている。

※該当の記事は、長崎県立長崎図書館で閲覧できます。



資料３　新聞記事（郷土関係）見出し検索（長崎県立図書館 HP）
出所：http://www.lib.pref.nagasaki.jp/newspaper/index.php（2016.6.10 閲覧）

長崎新聞の場合は４階郷土課カウンター、ほかの４紙については３階奉仕課カウンターへお尋ね下さい。

これで、島原ローカルの記事の現物（『長崎』）にまでたどり着けることがわかった。しかしながら残念なことに、よく読むと検索条件指定画面の下に小さく、

２００７（平成19）年２月１日以降、長崎市内で発行された長崎、西日本、朝日、読売、毎日の各紙に掲載された長崎県関係の記事見出しを検索することができます。

と記されている。蓄積・公開されているのは二〇〇七年以降の記事となっている（今回筆者は一九九〇年代初頭の記事閲覧を希望している）。希望記事現物にはなかなかたどり着けない。

やはり、現地でその必要性を認識した人の手で丹念にスクラップされたアナログ情報が唯一無二のデータということになろうか。今、手元には、『島原図書館新聞スクラップ帳』があるので、これに載せられている記事と、広く公開されている記事検索サービスの結果を比べてみる。

当時、被災住民にとっては最大の関心の一つであった、被災地の砂防ダム建設構想を報じた記事を掘り下げてみた。一九九二年二月二二日発表の砂防ダム建設構想をめぐる記事なので『毎日』「毎索」で翌日二三日とその後数日の日付で検索してみると、以下のような検索結果となり二件ヒットした。

10　長崎県が雲仙に火砕流防止堤防建設計画、３００戸移転も　住民に厳しい内容
毎日新聞 1992.02.23 大阪朝刊 二七頁 社会（全一三五〇字）

11　３００戸移転の計画　雲仙・普賢岳の砂防・治山の基本構想を住民代表に提示　PDF
毎日新聞 1992.02.23 東京朝刊 二六頁 社会（全六一一字）

二件の記事のうち「11」にはＰＤＦマークが付されていて、これをクリックすると東京版・朝刊に載った記事が出てくる。これを『島原図書館新聞スクラップ帳』の該当記事と並べてみる（資料４）。『島原図書館新聞スクラップ帳』には、同日に現場を取材した複数の社・記者の記事が数ページにわたって綴じられていて、そのある一ページに長崎版・各紙の記事が並ぶ（そのある一ページから。左が『毎日』長崎、下が『長崎』）。この同一日の数ページを手繰ると、それぞれの社・記者の独自の視角を読み取ることができる。こうして並べて見ると、事実通知にとどまる東京版・朝刊に比べて、現地版の諸記事からは、現場の雰囲気や、取材対象者の顔色と合わせて記者の息遣いまでもが感じられるのではないだろうか。何があったのかは東京版の通知でわかるが、そこでどのように事が起きていたのかは、現地版からのみ伝わってくる。

２－２．テーマ別・新聞記事スクラップ月刊誌

1992年（平成4年）2月23日（日曜日）　14版　26

300戸移転の計画

震災・砂防・治山の基本構想

砂防・治山施設計画の基本構想

300戸の移転必要に

県、基本構想提示

スーパー堤防建設など

普賢岳災害復興計画

県の提示に住民複雑

どうなる将来設計

「やむを得ない」の声も

資料４　全国紙（右上）と地方紙の紙面の比較

さて、そこで筆者のこうしたもくろみに沿うデータベースは果たしてないものなのか、新聞記事データベースをかわきりにその周辺をこの数年渉猟していたのであるが、その事業趣旨としては合致しそうな情報提供サービスがいくつか見出されてきた。

「新聞からできた本 こども」とは

「全国の新聞からこどもに関する記事を集めた、ユニークで便利な新聞スクラップの月刊誌です」

朝日、産経、東京、毎日、読売他、全国紙・地方紙の新聞から幼小児に関係する記事を切り抜いて編集する

新聞スクラップ誌です。いま、幼児教育、保育に従事している人たちが何に悩み、何に喜びを見出すかの 視点に基づき、各新聞紙から記事を収集して大切に編集しています。従事者の心と保護者・家族の心を結ぶためにできることを、児童を取り巻く現状から考えていくための中身が全部新聞記事のスクラップ誌です。

雑誌感覚で読みやすいＡ４版の88頁、資料としても便利な目次やキーワード索引のページもございます。

前月の1か月分の新聞記事をまとめて項目毎に読みやすく編集し翌月の15日に発行します。

一般の書店では取り扱っていませんので、送料無料で翌月15日前後には、お客様へ直接お届けできるように、当社から発送いたします。

本誌に掲載の記事は、新聞各社様の使用許諾を得た上で発行しています。（傍線は引用者）

（くまのみ出版ＨＰより　http://kumanomi.co.jp/book-medical.html，2016.6.10 閲覧）

当該サービスはまだ、数領域（「こども」「医療と健康」）に限られているようである。また、二〇一一年一月の創刊であるから（記事はその前月分から収集・掲載）、それ以前の記事を望むことはできそうにない（さらに、「全国紙・地方紙の新聞から……関係する記事を切り抜いて編集」とあるが、例えば上記で眺めた究極のローカル版までは網羅されていない）。

例えば、雲仙・普賢岳噴火災害に関して、上記「新聞からできた本……」にあるように、「朝日、産経、東京、毎日、読売他、全国紙・地方紙の新聞から……関係する記事を切り抜いて編集する新聞スクラップ誌」（傍点筆者）があれば、これを閲覧・活用したいと筆者は考えていたところであるが、過去に遡ってこれを揃えて公開しているところは見当たらなかった。

2－3．ローカル紙デジタルデータの展開

現実的にはこのように、ローカル版がスクラップされて過去に遡ってデジタル化されて広く一般公開されてはおらず、また、全国紙地方版や地方紙で、ローカル紙面をそのまま保存・公開してあるところも少ない。筆者の研究室には段ボールに詰めて、阪神・淡路大震災発災（一九九五年一月一七日）から五年間、定期購読した大阪（関西、神戸等）版の『朝日』『毎日』『読売』『神戸』朝夕刊が全て保存されているが（写真3）、今でも時たま各紙記者が当時の記事をあさりにやってくる。あの時のあの出来事をめぐって他紙がどのような記事を掲載していたのか（中央の縮刷版には載らない地方の出来事）、確かめにくる。[8]

各紙が今から過去に遡って、紙面・記事をデジタル化して保存（そして公開）することは難しいようである。その代り各地方紙では、現況のデジタル版を、このデジタル化・ネットワーク化の時代、様々につないで新たなサービス領域を開拓することとして、その可能性を見いだそうとする工夫が重ねられている（本稿の趣旨には直接は合致しないが、その展開例のみここで押さえておく）。

『河北新報』が運営するインターネットサイト「河北新報オンラインコミュニティー」（https://kacco.kahoku.co.jp/）は、ブログ作成者をつなぐコミュニティサイトで、東北の街や地域、社会づくりに貢献したい人々（ブロガー）と新聞社をつないでいる。一般的なブログサービスと違い、自ら発信したブログ記事が河北新報の紙面に掲載されることもあるとのこと。既存デジタルサービスの相互利用、すなわち水平展開例であるが、筆者はそこに五〇～一〇〇年分の記事データが蓄積・提供されて、いわば時間軸資料として縦糸として示されていれば（すなわち、垂直展開）、これに横糸（相互利用としての水平展開）が絡むことで、重厚な情報の醸成につながるのではないかと考える。

写真３　研究室に保存されている阪神・淡路大震災関連の新聞地方版

出所：筆者撮影（2016.7.8）

資料５ 「熊本地震 熊日紙面」
出所：http://kumanichi.com/saigai_shimen/（2016.6.10 閲覧）

また、現在進行形の震災取材記事がリアルタイムでネット公開されている。熊本地震（二〇一六年四月一六日、発災）を扱う『熊本日日新聞』がそれである（資料５）。同紙ＨＰでは、地震に関連するコーナーを新設して、毎日数記事ずつ（発災から一か月分に関しては「熊本地震 熊日紙面（五月一四日分まで）」として）ネット公開している。非常に綺麗なＰＤＦファイルで閲覧できる。発災当初からの事態の展開を紙面で追うことができる。しかしながら残念なことに、この発災一か月分の版についても「紙面（一部）を公開しています」と制約がかけられていて、同紙に掲載された全てのページを振り返って閲覧することはできない。有償デジタル版は展開されていない。同社には読者サービスとして、「思い出新聞」として「一八八八（明治二一年）一〇月九日創刊の「九州日日新聞」、一九一〇（明治四三年）四月一日創刊の「九州新聞」から購入ができます」として有償サービスがあり、また、「[有料・朝刊一部一二〇円、夕刊一部五〇円」過去一年間の新聞を保存しています」として「新聞バックナンバー」の有料サービスがある。熊本地震に関しては、読者サイドでこれらを組み合わせれば、発災からの記事スクラップ帳は作れるが、『熊日』（有償）サービスとしての電子記事スクラップサービスとして網羅的

には提供されていない。

また、同震災をローカルで扱う新聞としては、（『朝日』『毎日』『読売』地方版の他には）『西日本新聞』があり、同紙では「記事データベース」として月額固定料金の学校・図書館向けサービスが展開されていて、「一九八九年一月（平成元年）から朝夕刊紙面に掲載された記事」が「西日本新聞の地方版をほぼ全て」閲覧できるように整備されている（http://c.nishinippon.co.jp/service/database.php）。発災から数か月たった今、当該被災地でのローカル記事スクラップ帳作成は、こうした各紙種々のデジタル記事提供サービスも睨みつつ網羅的な資料としての閲覧を目論むとき、やはり現地で、その必要性を認識した人の手で丹念にスクラップされたアナログ・スクラップ帳が唯一無二のデータなのだと改めて認識させられる。

3．『島原図書館新聞スクラップ帳』デジタル化の意義と手順

筆者はこのたび、噴火災害対応の履歴をたどる必要性から同スクラップ帳を評価するところとなったが、これを利用・評価する地元の方々の目的・相談内容を司書にたずねたところ、そこでは地元・国見高校サッカーの活躍、名水百選のまちづくり、島原城や武家屋敷に関する観光事業、三県架橋[9]を含む地域振興、各選挙戦……等々が挙げられていた。いずれも全国紙・東京版で逐次フォローされるネタではないことから、現地での同スクラップ帳のニーズの厚さが理解できる。

一つにはこの意味で（すなわち、市民のニーズ：郷土事象の掌握）、同スクラップ帳を利用しやすくなるよう手を入れる（デジタル・データベース化して検索・ダウンロードできるように整備する）意義はあると思われる。筆者はまた、本稿の趣旨であるところの災害社会学的意義を感じている。それは島原の被災体験・対応履歴を学びたい

他（被災・未被災）地区が全国各地に様々に存在するという事実である。同じ噴火という災害因による被災を経験した他地区では、先例の対応を学びたい（最近、全国各地の火山が噴煙を上げ始めている）。また、島原の噴火災害への諸対応の一つずつを分節化してとらえて理解したところで、自らの被災状況に当てはめて考えていきたい他災害因による（未）被災地区もある。広く全国の未被災地区では、自地区の防災シミュレーション素材として彼の地の同型対応事例を学んでおきたいと考えている。すなわち、島原の噴火災害対応の履歴は、全国各地で様々な学びの対象となっているのである。学びの希望者が適宜、キーワード検索によって、島原の対応履歴を引き出せるといい。

当該資料を閲覧させていただき始めて四半世紀を経た今、いささか遅きに失した感もあるが、しかしながらこの数年、全国各地で火山が噴火し、あるいは（大都市ではなく、すなわち阪神・淡路大震災の対応履歴ではなく）中山間地の被災対応・復興の在り方が問われる被災事象が続き[10]、あらためて島原の噴火対応の履歴を丁寧にさらい再評価する必要が出てきている。そうした意味で、地元の専門スタッフが網羅的に渉猟した一次資料を今、あらためて整理して世に開く意義は大きい。

このような状況・認識のもと、島原図書館に『島原図書館新聞スクラップ帳』デジタル化作業のご相談をしたところ、快諾いただいたことで、作業が始まった。以下、現在、デジタル化作業およびそれと並行して検討が進められてきている公開規定の検討について、経緯と現況を記しておく。

3－1．デジタル化作業：各記事の画像化

『島原図書館新聞スクラップ帳』はA3判用紙・表裏に、（色褪せ対策として）コピーされた後に切り抜かれた各記事が所狭しと貼り出されていて（写真4）、これが一五〇枚（表裏両面で三〇〇枚）ほど、厚さにして四㎝く

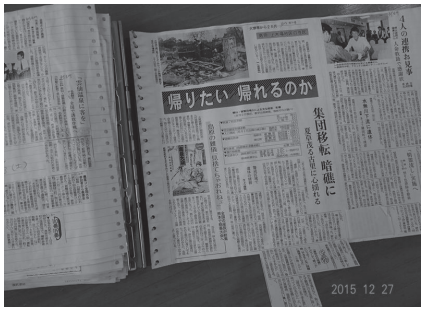


写真４　A3判に綴じられた『島原図書館新聞スクラップ帳』
出所：筆者撮影（2016.7.8）

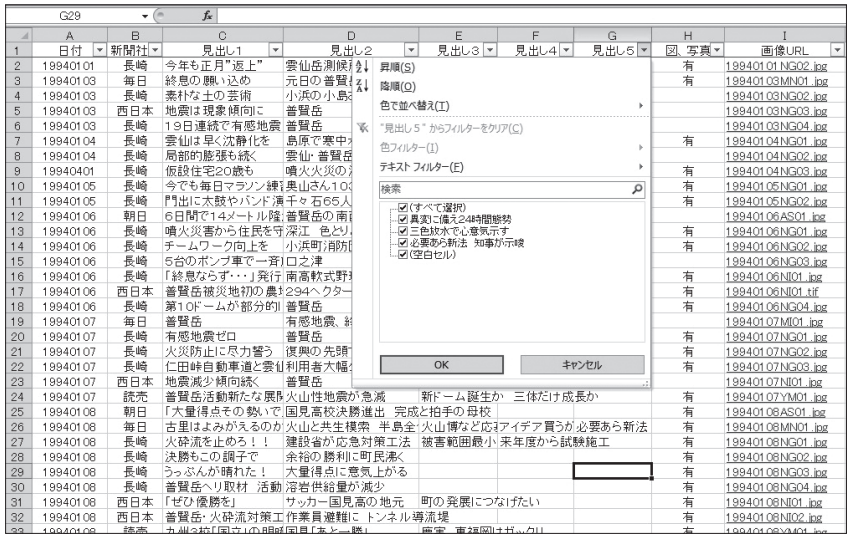
写真５　『島原図書館新聞スクラップ帳』のスキャニング作業
出所：筆者撮影（2016.7.8）

らいずつ一冊のファイルに綴じられている。現在これが四〇冊ほどあり（一九九〇年四月一日～一九九六年六月三〇日、写真2参照）、まずこれらを図書館から借り出し（借り出すに際しては、図書館に「特別貸与申請書」を提出）研究室に郵送した。

開梱してファイルを取り出し、一冊をばらして、A3判両面のスクラップ記事をスキャニングする（写真5）。これが約一万二〇〇〇枚ほど。A3判用紙には複数の記事が貼り付けられているので、これをトリミングして一記事を一画像（.jpg）として保存して、それぞれに画像番号（19920223A01＝一九九二年二月二三日『朝日新聞』記事01。同日の『朝日』にもう一つ記事があれば19920223A02、三つめがあれば19920223A03となる）を付す。おおよそ五万点余（写真4のように、A3判用紙一枚に三～四つの記事がスクラップされている）の記事が画像として確保された。

3-2. 記事の書誌的事項の書き出し：エクセルベースの作成

記事一つずつに書誌的事項を付与していく。これは以下に例示する小平市立図書館の記事登録規則に倣った。同図書館では、新聞名／掲載日／朝夕刊／版／面・段／見出し（抄録）／別刷り名／写真・図表の有無／シリーズ名／巻次、が採られていたが、私たちは、『島原図書館新聞スクラップ帳』の表示情報に合わせて、そのうち、新聞名／掲載日／見



	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	日付	新聞社	見出し1	見出し2	見出し3	見出し4	見出し5	図、写真	画像URL
2	19940101	長崎	今年も正月”返上”	雲仙岳測候				有	19940101NG02.jpg
3	19940103	毎日	終息の願い込め	元日の普賢				有	19940103MN01.jpg
4	19940103	長崎	素朴な土の芸術	小浜の小島					19940103NG02.jpg
5	19940103	西日本	地震は現象傾向に	普賢岳					19940103NG03.jpg
6	19940103	長崎	19日連続で有感地震	普賢岳					19940103NG04.jpg
7	19940104	長崎	雲仙は早く沈静化を	島原で寒中				有	19940104NG01.jpg
8	19940104	長崎	局部的膨張も続く	雲仙・普賢					19940104NG02.jpg
9	19940401	長崎	仮設住宅20歳も	噴火火災の				有	19940104NG03.jpg
10	19940105	長崎	今でも毎日マラソン練	奥山さん10				有	19940105NG01.jpg
11	19940105	長崎	門出に太鼓やバンド	演千々石65人				有	19940105NG02.jpg
12	19940106	朝日	6日間で14メートル隆	普賢岳の南					19940106AS01.jpg
13	19940106	長崎	噴火災害から住民を守	深江　色とり				有	19940106NG01.jpg
14	19940106	長崎	チームワーク向上を	小浜町消防				有	19940106NG02.jpg
15	19940106	長崎	5台のポンプ車で一斉	口之津					19940106NG03.jpg
16	19940106	長崎	「終息ならず・・・」発行	南高軟式野				有	19940106NI01.jpg
17	19940106	西日本	普賢岳被災地初の農	294ヘクター				有	19940106NI01.tif
18	19940106	長崎	第10ドームが部分的	普賢岳				有	19940106NG04.jpg
19	19940107	毎日	普賢岳	有感地震、					19940107MI01.jpg
20	19940107	長崎	有感地震ゼロ	普賢岳				有	19940107NG01.jpg
21	19940107	長崎	火災防止に尽力誓う	復興の先頭				有	19940107NG02.jpg
22	19940107	長崎	仁田峠自動車道と雲仙	利用者大幅				有	19940107NG03.jpg
23	19940107	西日本	地震減少傾向続く	普賢岳					19940107NI01.jpg
24	19940107	読売	普賢岳活動新たな展	火山性地震が急減	新ドーム誕生か　三体だけ成長か			有	19940107YM01.jpg
25	19940108	朝日	「大量得点その勢いで	国見高校決勝進出　完成と拍手の母校				有	19940108AS01.jpg
26	19940108	毎日	古里はよみがえるのか	火山と共生模索　半島全	火山博など応	アイデア買うが	必要あら新法	有	19940108MN01.jpg
27	19940108	長崎	火砕流を止めろ！！	建設省が応急対策工法	被害範囲最小	来年度から試験施工		有	19940108NG01.jpg
28	19940108	長崎	決勝もこの調子で	余裕の勝利に町民湧く				有	19940108NG02.jpg
29	19940108	長崎	うっぷんが晴れた！	大量得点に意気上がる				有	19940108NG03.jpg
30	19940108	長崎	普賢岳へり取材　活動	溶岩供給量が減少				有	19940108NG04.jpg
31	19940108	西日本	「ぜひ優勝を」	サッカー国見高の地元	町の発展につなげたい			有	19940108NI01.jpg
32	19940108	西日本	普賢岳・火砕流対策工	作業員避難に	トンネル導流堤			有	19940108NI02.jpg
33	19940108	読売	九州3校「国立」の明暗	国見「あと一勝」	廃家、再建図は	ガ山U		有	19940108YM01.jpg

資料６　『島原図書館新聞スクラップ帳』のエクセル統合書誌的情報表示画面

出し／写真・図表の有無、を採った。朝夕刊の別、版・面・段などについては各スクラップ記事には明記されていなかったので、これは省かざるを得ない。そのかわり（後に触れるが、検索機能を充実させるために）一つの記事について、「見出し」を最大五つまで拾うこととした。これらの情報をエクセルシートに転記していった（記事一点がエクセルシート一行）。

３－３．ハイパーリンクと検索手続き

エクセルシート上で、画像番号と各記事（jpg）は、ハイパーリンクで結んだ。エクセルシート上の任意の画像番号（例：画像URL19940101NG.jpg。例は、資料６のエクセル表の最上段の記事）をクリックすると、その記事が画像として出てくる仕組みになっている。また、五つの見出しの列の各一行目はプルダウンとした。そこをクリックしてキーワードを入力して「実行」する（リターン・キーを押す＝すなわち「検索」する）と、その言葉を含む見出し・記事がソーティングされて出てくる仕組みを取り入れた（資料６）。

3－4．公開の諸手続き

五万点余の記事がスクラップされて、その各々の記事の見出しを含む記事の書誌的情報が入力されて、記事本体画像と統合されたデジタルデータが完成した。ここまでは、人海戦術によるデジタル化作業である。学部ゼミ生の調査実習の一環として、デジタルデータベース作成練習としてこれを行った（写真6）。

さて、次に、これを公開・一般利用していくための利用規定を関係各機関と協議・吟味の上、定めなくてはならない。ここには、以下の二つの留意点がある。一つは、そもそもの著作権を有する新聞社[11]との協議、もう一つは、利用者への諸規定の周知・指導である。

いくつかの図書館・資料館をたずね、同様のデータベースをどのような段取りで作成してきたか、そしてそれをどのようにコントロールしつつ公開しているか、聞き取りした。

写真6　『島原図書館新聞スクラップ帳』エクセル統合書誌的情報作成作業

出所：筆者撮影（2016.7.6）

3－4－1．長崎原爆資料館～司書のハンドメイド

島原図書館作成・所蔵の新聞スクラップ帳のデジタル化作業、一般公開のありかたを見極めるため、島原からほど近い県内、長崎原爆資料館図書室での取り組みを参考にしようと同館をたずねた。

同館図書室では、新聞スクラップを昭和四〇（一九六五）年以来、継続している。その成果は圧巻で、開架として手に取って閲覧可能となっている（写真7）。

スクラップ帳作成作業を拝見した。毎日、司書が業務の合間を縫って、ま

写真８　長崎原爆資料館図書室の新聞スクラップ帳作成風景

出所：筆者撮影（2016.4.30）

写真７　長崎原爆資料館図書室の開架・閲覧可能な新聞スクラップ帳

出所：筆者撮影（2016.4.30）

ずは関連する紙面をコピー（新聞原紙の劣化防止）した後、当該記事を切り抜く（写真８）。これを日ごとにストックして、時間をみつけてエクセル入力（年月日、新聞名、タイトル）するが、これが本来業務多忙のため滞ってしまって、お話をうかがった二〇一六年四月時点では、二〇一三年一二月のストック記事のデータベース入力作業中とのことであった。並行してスクラップ帳に貼りつけ、これは一冊分が貼り終わると随時、開架書棚に公開していく。

利用者は、自らの関心に即してカウンターでキーワードを申し出ると、司書がこれを内部ＰＣで検索し、当該記事情報を伝え、利用者は開架書棚から該当スクラップ帳を手に取ることとなる。これまで分類は、以下の九領域であった。「1．被爆者・被爆当時の施設、団体、組織」、「2．医療・行政・福祉」、「3．慰霊・法要」、「4．資料・記録」、「5．調査・研究」、「6．団体・平和教育・都市」、「7．原爆投下」、「8．核軍縮・核平和利用」、「9．文化活動・論説・その他」。これに、このたび、「10．福島原発関連」が加わった。

利用者はスクラップ帳を手に取り、目当ての記事にたどりつく。当該ページのコピーの要望があったときには、著作権等の規則を口頭で伝え指導の上、コピーサービスをする。

新聞記事検索データベース

新聞記事検索データベース トップページ ＞ キーワード検索 ＞ 詳細画面

掲載日	2011年3月21日
新聞名	読売新聞 朝刊
版	多摩13S 25面
抄録	巨大地震 暮らしにも変化
分類	437 災害
地域区分	多摩地区

小平市立図書館　Copyright (C) kodaira city. all rights reserved

資料７　小平図書館のHP（新聞記事検索データベース）
出所：https://library.kodaira.ed.jp/np/index.html（20160610 閲覧）

写真９　『小平市に関する新聞記事切抜き』（冊子）
出所：筆者撮影（2016.6.11）

３－４－２．小平市立図書館～著作権処理と閲覧・コピーの指導

東京都小平市では市立図書館において、「このサイトは、昭和五二年度から、朝日・読売・毎日・日経・産経・東京新聞等に掲載された記事の中で、図書館に関する記事及び小平市に関する記事の切り抜きをデータベース化したものです」として「新聞記事検索データベース」（資料７）を作成していて、図書館ＨＰからここに入り、記事概要を検索できるようになっている。そしてその新聞記事自体はスクラップされて、コピー、デジタル化・入力、製本されて、『小平市に関する新聞記事切抜き』として毎年一冊刊行されている（写真９）。その作業過程は以下のとおりである。

市内数か所ある図書館分館のうち上宿図書館にて、図書館ボランティアとして位置づけられているシルバー人材の方々が、図書館で

新聞記事見出しによる水俣病関係年表1956-1971

- 1956年
- 1957年
- 1958年
- 1959年
  - ・1−8月
  - ・9−10月
  - ・11月
  - ・12月
- 1960年
  - ・1−6月
  - ・7−12月
- 1961年

新聞名	年	月	日	記事見出し
西日本	1956	5	8	死者や発狂者出る、水俣に伝染性の奇病
熊日	1956	5	18	井戸水からホリドール検出、水俣の奇病
西日本	1956	5	19	井戸水にホリドール、水俣の奇病、原因を究明
熊日	1956	7	1	水俣の奇病、患者八名に
熊日	1956	7	6	塩化ビニール、大増産、新日窒水俣で施設拡張
熊日	1956	8	18	水俣の奇病解明へ、近く熊大教授ら総合検討
朝日	1956	8	19	ボラ漁さっぱり、"新日窒のせい"と漁民／水俣市袋湾
西日本	1956	8	22	月ノ浦奇病にメス、熊大が積極的に乗出す
熊日	1956	8	25	医学者五十人現地へ／月ノ浦部落、"ビールスではない"
西日本	1956	9	1	奇病、幕北脳炎と仮称、熊大医学部、希望患者を付属病院へ
熊日	1956	9	9	総合病院に拡張、奇病対策にも全力、水俣市会
熊日	1956	9	10	水俣の奇病で一人死ぬ／熊大医学陣、現地へ、"驚くべき生活環境"

資料８　「水俣病公式確認 50 年　水俣病関連資料の公開」サイト（熊本大学附属図書館）

出所：http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/suishin/minamata/5chronicle/index.html（20160610 閲覧）

定期購読している新聞各紙のスクラップを行っている。図書館では独自に「小平市新聞記事登録規則」を作成して、これに基づいて作業が行われていて、スクラップされた記事は台紙に貼られてコピーされ、その素材はデジタル化されて「記事の書誌的事項」（新聞名／掲載日／朝夕刊／版／面・段／別刷り名／見出し（抄録）／写真・図表／シリーズ名／巻次）がＰＣ入力される。一年分素材がたまると製本されて図書館に所蔵される。

その閲覧過程は以下の通りである。利用者は図書館ＨＰから「新聞記事検索データベース」に入り、「新聞名」や「掲載日」「分類」などのキーワードを入力して、前記画面（資料７）の情報を引き出す。これを自身で引き写してレファレンスカウンターに持ち込むと、閉架書庫から当該図書が届けられる。

これには一冊ずつ「Ｋ／Ａ７／１０」などの請求番号が付されていて、一冊の本として登録されている。一冊の本として登録されていることから、これの該当ページをコピーする際には、著作権・複製権に基づくこととされていて、コピーできるのは一冊の半分までとなることが小中学生にも口頭で丁寧に教授される。これまでの利用状況では、利用者各自が指定した日付、記事の（一ページおよびその前後の数ページの）コピーのみを望むので、この一冊・千数百ページの半分を超えるコピーの希望はなかったとのこと。また、記事に添えられている写真のみをコピーして使うことは、

これはまた写真に関わる著作権に基づき別に規制されている（新聞社許諾を別にとらなくてはならない）ので、コピーの際には、検索された該当ページ（記事）全体のコピーをとるように指導しているという。

このように、小平市立図書館では、制度化された図書館業務の一環としてスクラップ記事のデジタル化作業が進められていて、それが一冊の本として図書化されて登録され、したがってその該当個所のコピーは著作権・複製権に基づき運用されていて、その規定に関する教授が窓口で丁寧に行われている。

3－4－3．熊本大学附属図書館（新聞記事見出しによる水俣病関係年表）――記事ＰＤＦの一部公開

熊本大学附属図書館では、当地の水俣病問題に関する地元各紙の記事を整理・一部公開している（資料８）。

熊本大学附属図書館ＨＰ上の「水俣病公式確認五〇年　水俣病関連資料の公開」サイトには、これまでの水俣病に対する大学の取り組みが概略されたところで、平成一八年に水俣病公式確認五〇年を期に一部公開されることとなった諸資料が紹介され、その一つとして、「2.新聞記事見出しによる水俣病関係年表」が挙げられている。そこを開いてみる。サイトは年表形式になっており、画面左の「新聞記事見出しによる水俣病関係年表１９５６―１９７１」から「年」を選択して、出てくる各年の記事の一覧を眺めることができる。情報は、「新聞名」「年月日」「記事見出し」のみであるが、「見出し」を追うだけでも、事態の年次展開が見えてくる。さらに、記事見出しのうち青文字をクリックすると記事現物のＰＤＦが閲覧できるようになっている。一番最初のＰＤＦ閲覧可能記事「井戸水からホリドール検出、水俣の奇病」（一九五

熊日1956.05.18

井戸水からホリドール検出
水俣の奇病

資料９　水俣病関連新聞記事スクラップ

出所：http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/suishin/minamata/5chronicle/index.html（2016.6.10 閲覧）

六年五月一八日『熊日』）をクリックして出てくる記事（資料９）は、実名箇所が黒塗りされてプライバシー保護がかけられている。このサイトのトップページには以下の注意書きが掲げられている。

おことわりとおねがい

これからご覧になる見出しや記事には、個人や法人を特定できる可能性のあるものが含まれております。

しかしながら、その歴史的価値および学術的価値に鑑み、あえて原記事のとおりに表示するものです。

ご利用にあたっては、以上の点にご留意の上、くれぐれも慎重にお取り扱い下さるようお願いいたします。

なお、作成にあたっては充分注意を払ったつもりですが、不都合な点等がございましたら、以下にご連絡いただければ幸いに存じます。

http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/suishin/minamata/5chronicle/index.html（2016.6.10 閲覧）

研究者サイドの配慮（現場に対峙する倫理規定）が適切に表されている点に注目しておきたい。

現時点では一九五六―一九七一年に限定された記事・年表の公開であるが、「今回公開したものは、膨大な資料の一部です。今後とも継続して事業を進め、さらに充実したものにしていく所存です……」とあるように、今後も更新・公開されていくこととなっている。記事に関しては、

一九七一年までの熊本日日新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞（順不同）の水俣病関係記事見出しを年代順に配列したものですが、一部は原記事全文（ＰＤＦファイル）へリンクしています。原記事へのリンクに際しては、私権の保護の観点から選択しました。熊本日日新聞社原記事へのリンクの許諾については同社のご理解とご協力をいただきました。深く感謝します。

http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/collections/minamata/(2016.6.10 閲覧)

とあるように、特に『熊本日日新聞』には許諾をとりつけて原記事（ＰＤＦ）公開にこぎつけている旨、報告されていることに着目しておきたい。

4．『島原図書館新聞スクラップ帳』のデジタル化、一般公開の留意点

被災各地の公立図書館等で、定期購読するローカル紙を活用してスクラップ帳を作成するさいの作業手順（デジタル化）と公開手順（著作権・複製権遵守と指導）について、先例を見てきた。これをもとにこのたび、『島原図書館新聞スクラップ帳』の公開のあり方を考えるとき、以下の三点が留意点として浮かび上がってきた。1.新聞社との事前協議（著作権・複製権）、2.デジタル化作業の必須項目、3.利用者への現場指導。

4－1．新聞社との事前協議（著作権・複製権）

スクラップ帳を作成・公開するに際しては、その市民利用の現場での諸規定の運用（現場指導）と併せて、すなわち、前記1と3を併せて検討しておく必要がある。

まず、スクラップ帳を作成していくことを、事前に各新聞社に届け出ておく。小平市立図書館の場合は、毎年、スクラップ記事として製本していくこと（したがって、刊行された図書として請求番号を保持することとなる）までを事前に届け出ている。製本・刊行するところまでいかずとも、スクラップ帳として図書館の請求番号を付すところまでとする場合も（長崎原爆資料館図書室の例）、そのような形態で取りまとめられて保管していくことを事

前に届け出ておく。

このたび、『島原図書館新聞スクラップ帳』については、一九九〇年前後から一九九六年度までの記事がすでにスクラップされているので、各新聞社に対しては事後承諾をとることとして（熊本大学附属図書館のように）、こうしたスクラップ帳の作成経緯と公開手続きを検討していることを届け出ることとする。

4－2．デジタル化作業の必須項目

今回はこのように現地市立図書館でまとめられたスクラップ帳のデジタル化作業に取りかかった。小平市立図書館のように、「記事の書誌的事項」として、新聞名／掲載日／朝夕刊／版／面・段／別刷り名／写真・図表有無／シリーズ名／巻次、までが網羅されているといいだろう。『島原図書館新聞スクラップ帳』では、スクラップ帳の台紙に鉛筆でメモ書きされた限られた情報から、新聞名／掲載日／見出し／写真・図表の有無、が採られることとなった。

これら記事の書誌的事項は、エクセルファイルに入力され、それらはキーワード検索できるようにする（入力規則によるダウンリストの作成）。したがって、前記の書誌的事項として入力する「見出し」については、できるかぎり多く、すなわち大見出しのみならず、中・小見出しまで労力を厭わず拾っておくといい。次いで、このデジタルデータにアクセスして利用する段まで、すなわち次の4－3の直前までここで記しておこう。

この記事の書誌的事項を網羅したエクセルファイルは、前記の検索機能を備えたところで、これを一般公開する。一般公開の方法は、小平市立図書館のように、図書館ＨＰの該当箇所からリンクして、その検索サイトにたどり着けるようにする方法がある。あるいは、館内専用ＰＣ端末で検索してもらうことでもいい。現時点（研究室で作成しているデータベース）では、そこに記されている記事番号と記事本体（jpg 画像）はハイパーリンクで

結ばれているが、この形での公開は推奨できない。次の4－3で問題となり得る著作権・複製権に関わる事柄である。いくつかのキーワード検索を重ねて、該当記事の記事番号を入手した利用者は、その記事番号をメモして司書に渡す。司書は、館内専用ＰＣにアクセスして、その記事（jpg画像）を引き出し、複写サービスして利用者に渡す。専用ＰＣ（司書利用限定）では、記事番号と記事本体（jpg画像）はリンクされていて、当該記事は容易にダウンロードできる。あるいは、キーワード検索でヒットした記事（jpg画面）の元のスクラップ帳ページを利用者に示してあげれば、利用者は従来のアナログ・スクラップ帳を手に取ってみることもできる。

小平図書館では製本・刊行されて請求番号が付された該当年度刊の『小平市に関する新聞記事切抜き』を、司書が閉架書棚から取り出して利用者に閲覧させる。長崎原爆資料館では、利用者からの相談、申し出に応じて、司書がキーワードを司書専用ＰＣに入力して、該当スクラップ帳の請求番号を検索し、当該冊子のありかを利用者に伝える。いずれにしても、以下の4－3の著作権に関わる規定の概説を行えるステップが担保されていることが望ましい。

4－3．利用者への現場指導

この段階、すなわち、スクラップ記事（あるいはjpg画像）の閲覧がかなったところで、複写、引用等についての規定を教授し、併せて特に、その記事情報を論文等に記載する際の新聞社への届け出作法について現場指導するといいだろう。入手した記事は、それがこうして取得したコピー（あるいはjpg画像）であれ、毎日購読している新聞からの自身の手による切り抜きであれ、論文等に利用する場合には新聞社から許諾を取らなくてはならないことを厳に指導する必要があるが、これはその規定や慣行を簡潔にまとめたプリントを当該窓口に貼り出しておいて、詳細はさらに別紙を読み込むように誘導することでもいいだろう。

スクラップ記事の形態や、書誌的事項のデータベース化の状況、その記事（画像）の保管・公開スタイル等の組み合わせによって、利用者が記事（画像）を手にするまでの経路やステップ数は様々となるが、それを入手した後の利用については、各新聞社がほぼ均一に表している著作権に関する規定に従うよう指導が必要となる。最後のこのステップについて、教育情報機関としての図書館が適切に対処していることを示すことが、こうしたスクラップ帳利用の展開・深化の礎となる。

むすびにかえて

このたびは、筆者がこの四半世紀、折に触れて利用させてもらってきた『島原図書館新聞スクラップ帳』のデジタル化作業の意義を再確認して、その作業の経緯・進捗状況を記しつつ、その公開のありかたを検討した。新聞業界では紙面のデジタル化が進み、過去の記事を様々に検索できるようになってきてはいるが、現時点ではまだ、十分に過去に遡って極ローカルの記事が網羅的にデジタル化されて公開されてはおらず、したがって現地では、その必要性を認識した人の手で丹念にスクラップされた各紙統合アナログ・スクラップ帳が唯一無二のデータとなっている。本稿では独自にスクラップ帳を作りつつそのデジタル化を進めている図書館の取り組み状況に学びながら、島原図書館との共同作業としてのスクラップ帳デジタル化、その公開のあり方を検討した。

被災地では過去の取り組み事例に学びヒントを得たいとの意向が強い。そこでは当該被災状況を分節化して把握し、同型事象の過去の彼の地の取り組み状況を様々に渉猟することとなるが、その際に、古今内外のローカル記事スクラップ帳に蓄積されている諸情報の意義は大きい。将来の未だ見ぬ彼の被災地に資するためにも、被災地の既存スクラップ帳（記事）のデジタル化・公開の意義は大きい。『島原図書館新聞スクラップ帳』デジタル

化事業を進めて、これが例えばお隣の現況の被災地・熊本の方々に閲覧・利用していただけるか……。作業・公開規定の確定を急ぎたい。

（1）岩手・宮城内陸地震（二〇〇八年）の被災地・栗駒市では、同市立図書館において被災直後から『平成二十年度岩手・宮城内陸地震 栗駒関連新聞記事①～⑤』（発災から丸一年分）としてスクラップ帳を作成していた（写真1）。筆者の研究室では同図書館と相談して、これを閲覧・館外特別貸出させていただく代わりに、デジタル化（その仕様等は、本稿で紹介する島原図書館のものと同型である）してお届けした。近い将来、本稿で扱う島原図書館版を作成するための予行として、これを企画した。

（2）既存法制度が、被災者の生活再建に資するというよりは、これに立ちはだかる壁となっている現実として捉えられ、天災・人災という認識を超えたところで新たな造語として「法災」「官災」が使われた。

（3）我々東京グループの母体・早稲田大学社会科学研究所都市研究部会の雲仙調査団長・浦野正樹助教授（当時）の演習授業を受けた同大卒業生に神戸金史記者（『毎日新聞』・当時）がいて、雲仙取材陣の中では最若手として現場を駆け回っていた。神戸、一九九五を併せて参照のこと。

（4）復興はおおむね都市基盤再整備事業として、大型公共土木事業の前倒し実施となるので、より上位の全国総合開発計画（全総）から演繹されるローカルの開発計画を整理して控えておくようにする。そこでそれらの作成主体である市長公室・企画局をまずは訪ね、次いで建設省各地方建設局（現・国土交通省各地方整備局。当時の雲仙の場合は、九州地方建設局）の出張所で復興土木事業の関連図書を閲覧・ファイリングする。また、現場の地域権力構造などの理解のために情報公開室で、広報・議会報・議会議事録の三点セットを数十年分閲覧・コピー・ファイリングする。そこには前記の全総・都市マスタープランに連担するローカル開発計画の審議過程が漏れなく記録されていて、そこで拾える事業名称、担当部署、役職・氏名からコンタクトすべきインフォーマントの目星がつけられることとなる。

（5）日本全国向けにニュースを報じる新聞は一般的に全国紙と呼び、このうち首都・東京に本社を置く新聞を中央紙と呼ぶ（その対義語が地方紙・ローカル紙と呼ばれるものである）。日本の全国紙では、『朝日』『毎日』『読売』『日経』『産経』の五紙を五大紙と呼ぶ。

（6）　例えば、阪神・淡路大震災（一九九五年）が発生すると『読売』では、一月一七日付「号外」から二月一七日付夕刊までの一か月分について、普段は縮刷版を発行していない大阪本社発行の最終版紙面から重要記事を一冊の本にまとめて『大阪読売特別縮刷版 阪神大震災』として発行した。しかしあくまで重要記事をセレクトしてまとめたもので、大阪版をそっくり縮刷版にしたものではない。東日本大震災で『朝日』は『朝日新聞縮刷 東日本大震災 特別紙面集成 2011.3.11 ～ 4.11』（二〇一一年五月三〇日）を刊行しているが、これは東京本社版・朝刊・夕刊・最終版によるもので、オピニオン面、「声」欄、地方版は除かれている。

（7）　デジタル版だけの定期購読も可能だが、宅配新聞朝夕刊購読料金に若干の追加料金を支払うことで全デジタル版を閲覧できるサービスが提供されている。

（8）　例えば『神戸』記者は、自身と部局にストックされている自社の過去の記事を渉猟して本日の記事執筆の参考とすることができるが、他紙の同様のストック情報にアクセスする環境はない。

（9）　長崎県島原半島から熊本県天草と鹿児島県長島（長島海峡）を二つの長大橋で結んで、九州西岸地域を一体化する延長約一一〇㎞の地域高規格道路網構想で、雲仙・普賢岳噴火災害の復興を半島振興にリンクさせて考える際に、よく話題とされたことがらである。

（10）　都市災害であった阪神・淡路大震災（一九九五）以降は、中山間地域（あるいは限界集落とまで言われる地）での自然災害が続発した。鳥取県西部地震、有珠山噴火・三宅島噴火（二〇〇〇）、芸予地震（二〇〇一）、十勝沖地震（二〇〇三）、新潟県中越地震（二〇〇四）、福岡県西方沖地震（二〇〇五）、能登半島地震・新潟県中越沖地震（二〇〇七）、岩手・宮城内陸地震（二〇〇八）、東日本大震災（二〇一一）、熊本地震（二〇一六）など。

（11）　新聞各紙ではデジタル版の普及に合わせて各ＨＰで「著作権について」として、法的根拠、私的使用範囲の解釈、学校等教育機関での利用上の注意、そして許諾申請手続きのあらましを詳説している。これらとともに、日本新聞協会の「ＮＩＥ教育に新聞を」サイトで「学校における新聞の二次利用（著作権）」として「学校その他の教育機関における著作物の複製に関する著作権法第35条ガイドライン」をフローチャートとともに示している。http://nie.jp/teacher/copyright/（20160610 閲覧）。

参考文献

江川紹子、一九九四「『法災』に襲われる雲仙」『諸君（10月号）』（第26巻）。
伊藤清隆・大矢根淳・浦野正樹、一九九四「雲仙普賢岳噴火災害における高齢者と〈災害の長期化＝復興過程〉」『地域災害における高齢者問題とその対応』（早稲田大学社会科学研究所）。
神戸金史、一九九五『雲仙記者日記――島原前線本部で普賢岳と暮らした１５００日』ジャストシステム。
南亮一「図書館と著作権――著作権法の知識と判断基準――」（国立国会図書館平成27年度図書館職員専門研修）。http://iri-project.org/bunka/kenrichousa/seminar20160229/（20160610 閲覧）
村上泰子、二〇〇四「研究文献レビュー――図書館と著作権問題」『カレントアウェアネス』（No.280）。
中田彰生、二〇〇三「図書館における新聞記事電子化の著作権問題」『情報の科学と技術』（53巻11号）。
日本書籍出版協会、二〇〇四「学校その他の教育機関における著作物の複製に関する著作権法第35条ガイドライン」。http://jbpa.or.jp/guideline/index.html（2016.6.10 閲覧）
大矢根淳、一九九六「災害復旧・復興課程＝生活再建に向けた組織活動の展開――雲仙普賢岳噴火災害直接被災地＝上木場の取り組み――」『社会科学討究』（No.122）。
横田尚俊、一九九五「災害からの復旧・復興過程と地域社会」『社会分析』No.23。